



「理学療法概論」

奈良 勲 編

理学療法（学）の学問的体系の確立についてその重要性が論じられて久しい。しかし、啓発的な、また警告的な意味での指摘ある文献は数少なく、現在その理念と方向性を示唆すべき作業の必要性が論じられつつある。

「理学療法」という古来より存在してきた治療法（手技）が、リハビリテーションという理念に基づいて大きく再認識され、発展しつつある中で、今こそ医学全体の中での位置づけ、また専門職としての立場の確立を改めて迫られているのではないだろうか。その意味でも本書の発刊はその大きな第一歩を踏み出したと言っても過言ではないと思われる。

本書の内容は9章から成り、第1章「理学療法と倫理・哲学」と第7章「理学療法士としての適性」では、専門職としての存在を挙げ、その資質と価値感の認識の必要性を論じている。第2章「理学療法の歴史」では、歴史的背景を述べ、将来への発展のための提言をしている。第3章「理学療法の対象と治療手段」は他の章と配列上やや違和感があるが、その内容は類書にないもので

一読に値する。第4章「学問的体系化」と第5章「理学療法と研究」では、科学的治療法確立の手段と研究の意義および進め方が提示されている。第6章「理学療法の役割と職域」では、現状の把握を行い、将来への展望が示されている。第8章「理学療法教育」では、教育の手法と環境について論じている。第9章「理学療法士の組織と活動」では、協会の歴史と役割りのあり方を述べている。

最後に本書の内容は単に「理学療法とは……」でなく、論述されているものを土台として、理学療法士の共通の課題として取り組むための大きな材料であり、問題提起でもあり、このことが「学」の確立に不可欠なことで、このことがまさに編者の意図するところではないかと思う。10年後、20年後の布石のためにも……。

（A5 頁324 ¥3,200 円350 医歯薬出版 1984）

（高知リハビリテーション学院 理学療法士
小嶋 裕）